

【暮らしの学び舎 Salmatt 企画】家庭科で育つ子どもと私の Well-being

第5回 20260822(土) 10:00-12:00

2026 年度「暮らしの学び舎 Salmatt 企画」家庭科で育つ子どもと私の Well-being の第5回カトリバ「家庭科教育のこれから」を8月22日(土) 10 時からオンラインで行いました。約15名の方々が参加くださり、梶山さんと中村さんが企画の準備, 当日の運営, 進行を担当してくれました。第4回(前回)の振り返りを行った後, 「子どもも教師も開放される授業づくりー「家庭科を行う」ってどういうこと?ー」というテーマを掲げ, 「今後の家庭科教育に向けてこれまでの知見を踏まえ現場でどのように形にしていけるか検討する」ことを目的として, 中学校の一般的な学習指導案(衣生活と食生活)を共有しながら, ケーススタディと協議を行いました。

プログラムは次の通りでした。

9:45~10:00(15分) 受付

10:00~10:10(10分) 趣旨説明, スタッフ紹介

10:10~10:30(20分) 前回の振り返り(工藤先生のスライド, アンケート結果)

10:30~11:50(80分) ケーススタディ及び協議

11:50~12:00(10分) 諸連絡, アンケート, 次回予告

前回第4回の工藤先生の講演「今 家庭科の先生方に伝えたいこと」の詳細内容は, 第4回活動報告の別ファイルをご覧ください。概要は次の通りでした。

1. 次期学習指導要領改訂の議論から 高まる子どもたちへの期待 広がる家庭科の可能性と課題の多さ
2. これからの“よりよい家庭科”への道 「家庭科を行う」
3. 家政学の3つの総合性から導かれる家庭科教育の共通基盤
4. いったんのまとめーディスカッション

以下に要約を示します。

●「家庭科で行う」から「家庭科を行う」への転換

現状の家庭科は, 少子化・高齢化・デジタル化などの社会課題を分野別構造(家族・衣食住・消費・環境)の中に次々と入れ込む傾向があり, 内容が百科事典状態になっていると指摘された。「家庭科で社会課題を扱う」のではなく, 「家庭科の枠組み・方法論・内容論をもって社会課題に向き合う」という発想の転換を提唱してくださいました。時間数不足・教員配置など制度的問題もあるが, 根本的な考え方を変えなければ課題は解消されない。さらに家庭科の視点でしか見えない課題について子どもたちと考えることが重要であるとのこと意見をいただいた。「家庭科を行う」ためには, 家庭科独自の枠組み・方法論・内容論の確立が必要ということでもあろう。

家庭科の3つの総合性に対する工藤先生の提案をもとに, 「家庭科で行う」授業から「家庭科を行う」授業への転換を目指して, 具体的に学習指導案を検討する。事例として中学校家庭科の一般的な衣生活分野と食生活分野の題材を取り上げる。

題材名 「私たちの衣生活ー快適で豊かな衣生活について考えようー」(別添ファイル)

題材名 食生活と自立「日常食の献立」(別添ファイル)

以下に要約を示します。

●学習指導案を通したケーススタディ

工藤先生の前回の講演の感想を共有し, 参加者は三つの視点(本質的な問い, 生徒を自由にする指導, 日常生活への還元と評価)を基に, 実際の指導案を通じて情報共有を行うことが提案された。本質的な問いの具体例, 生徒の思考を解き放つための指導アプローチ, そして日常生活への還元と評価の方法について意見交換を行う

ために、NT から、中学校家庭科の衣生活の学習指導案が共有され、制服と学校の体操着を題材にした 17 時間の指導計画が説明された。

SN は子供たちに服のタグを観察することから始めて意見を聞くことを紹介し、SYu は中学校一年生の実際の衣生活状況と指導案のギャップがあることを指摘した。また中学校での制服と部活による体操着の使用パターンについて具体的な経験を共有し、地域による差異があることを説明した。SYo は中学校二年生の生徒が自ら私服を選ぶようになり始めていることを報告し、実際の日常生活への応用についての重要な問いを指導に含める必要性を述べた。OK は実際の中学校での研究授業実施経験から、学生が自ら準備した課題を提示することから授業の流れが崩壊することを例に、子どもたちの集中力とコミュニケーションの重要性を強調した。参加者は、まず取り扱い表示を学習してからでないと、衣服選択について学べないと考えのではなく、その順序を変えることによって、生徒の関心を維持し理解を深める効果があることを共有した。

●衣生活内容の題材構成と授業計画

衣生活内容の題材計画と授業構成について、SA と KR は、17 時間の題材構成全体の流れと、特に中学校一年生の実情に合わせた適切な導入方法について課題を表明した。KR は、自立する中学生としての生活についての本質的な問いを含める必要性を強調し、生徒と共にアンケート調査を行って課題発見を促す方法を提案した。TA は、子供たち自身の選択を促す導入方法の重要性を指摘し、自分らしい着方から始めることを提案した。KY は中学校での総合的な「着る」という学習の重要性を強調し、実際の生活状況を模倣したパフォーマンス課題の活用を提案した。NT と SA は、知識の断片化を避け、子供たち自身の課題解決に必要な知識を自分で発見できる流れを作ることの重要性について述べた。

●家庭科授業改善について

KY は、家庭科の授業における知識の習得と認識の枠組みの重要性について述べ、子供たちの実態に合わせた題材設定の必要性を指摘した。SYu は、自身の小学校時代の家庭科の経験を共有し、子供たちが自分らしく生活するための実践的な知識の習得の重要性を強調した。また、家庭科の授業で子供たちのライフスタイルと実践的なスキルをより適切にマッチングさせる方法について意見を交換した。

●知識の構造化について

生徒の個人的な体験を通じて知識構造を構築することについて、KR は知識の並べ方ではなく、題材の構造化が重要であると指摘した。SA から、制服の取り扱いに関するパフォーマンス課題の事例が共有され、グループによる課題解決学習を通して取扱い説明書を作成する題材の流れについて説明した。断片的な知識を学んで課題を探る流れではなく、課題を探究するために必要な知識を自ら探り習得し、構造化していく流れである。

家庭科の学習指導要領における評価方法について、SA は指導主事の役割について言及した。

●食生活内容の題材構成と授業計画

NT は、食生活の一般的な学習指導案を提示し、日常食の献立に関する 7 時間の計画を説明したが、SYu が実際の生徒の食習慣と教育内容にギャップがあると述べた。KR と KU は、子供たちの食習慣と食生活の課題について意見を共有し、特に中学生の食事量への関心や、個人的な食習慣と社会的な食習慣のバランスについて話した。

まとめ

最終的に、家庭科の授業における「本質的な問い」と生徒の主体性をどう実践に結びつけるかがテーマであったと思います。中学校の衣生活および食生活の学習指導案を共有しながら、テーマについて検討することによって、それぞれの立場や状況を踏まえて意見をだしやすかったと思われます。学習内容が中学生の実態や生活とどれだけ結びついているか、授業の導入やストーリー性、生徒の関心喚起の難しさなどについて具体的な経験や問題意識を共有することができました。題材全体の流れが断片的で本質的な問いを貫けていない点、事前アンケート結

果を生徒と共有して問題発見と学習計画と一緒に立てる重要性, 学年間のつながりを意識した授業設計の必要性などを課題として考えることができました。全体として, 一般的な学習指導案を起点に, 家庭科の本質と現場の葛藤の橋渡しを, 参加者同士の対話を通じて模索する場となったと思います。

次回予告

9 月に開催される第6回の染色教材作り体験活動について, 対面でサルマツ工房において実施されることが案内されました。また, 参加者へアンケート記入を依頼し, 2026 年度後期 6 回の内容公開に向けて, 準備中であることを伝えました。10 月(第 1 回)は, 岸田蘭子先生が家庭科授業におけるオーセンティックをテーマに講話してくださることが決定していることが発表されました。